

ました。それによって、読者へ知らせるなど、書店としての対応をしてきたのです。

もし情報を遅らせたことに、何らかの意図が無いとするならば、こんな大事な情報を直前になってしか知らせてこなかった福音館の販売課の営業センスが、ぼくには不思議でなりません。

このやりとりの後すぐ、福音館から15点のリストをファックスで送ってきました。そのファックスを見れば、ちゃんと書店用に印刷されたチラシではありませんか。

と言うことは、もしかして、ピツポにだけ情報を遅れて知らせたと言うことも考えられるのです。でも、まさかね、いくらピツポが福音館を時々批判するとはいえ、そんなアンフェアなことをするわけがないだろうし……。

実はこの後知り合いの子どもの本専門店4〜5軒に、今回のことを何時知らせてきたか聞いてみました。

余りこのことに問題意識が無く覚えていない店や、ぼくと同じような問題意識を持っていて、怒っている本屋などありましたが、やはり情報は早くはなかったようです。ピツポが一番遅かったこともわかりましたが。

しかし、2月の初め、営業の人がまわってきて説明してくれたという東京にある専門店もありました。

閑話休題

送られてきたリストの中には、なんと、ある幼稚園の来年度の採用絵本(4月から

毎月1冊子どもに配本する)が2点含まれていたのです。幼稚園では780円として予定を組んで、既に在園生の親には連絡しているはずですが。

ぼくは再び福音館へ電話しました。今度は販売課長が出てきました。理由を話して、とにかく「ゆきむすめ」と「ころはちだいまようじん」を各80冊を旧定価本(780円の本)で確保してくれるように依頼しました。暫くして、福音館から電話があり、2点の絵本は確保できたということでした。とりあえずは良かった。

それから、ぼくは今回の15点の旧定価の絵本を各5冊ずつ注文をしました。ところが、既に「ぐりとぐら」「ふるやのもり」「たからさがし」「ぞうくんのさんぽ」の4点の在庫が無いと言われたのです。

ここでぼくの電話の声がまた大きくなったのです。「きみら一体何を考えているのだ! 新しくなった絵本を喜ぶ人もいるだろうが、たとえ60円でも安いのを欲しいという読者だっているのだ」もうこうなるとぼくもやけつくそだ! 「だいたい新規製本の15点は重版に重版を重ねて、いわば福音館に莫大な利益をもたらしてきた定番の絵本ばかりじゃないか、劣化によって仕上がりが悪くなったのなら、新規製本は値下げして出せ! それを読者への長い間の感謝ではないのか!」いけない、いけない……興奮してはね!

どんなつもりか、販売課長は「この件で4月13日に販売部長と一緒にピツポへ伺わせてください」という。拒否する理由もな

いので「どうぞ」ということになりました。

4月13日課長と部長はきたけれど……。ようするに「今回はもうしわけありませんでした」と言うことだけなのでした。

そうそう! 遅れた理由は社内的な人事異動などで混乱していたのが一つの理由だといっていました。(こんな事は外部のぼくには全然関係がないのにね)

余談ですが、このとき、かつてピツポ新聞紙上で「大型絵本」について何度か論争した「大和書籍編集部長はお元氣ですか?」とお尋ねしたら、何と退職したということでした。(まだ、お聞きしたいことがあったのに、ちよつと残念です)

先程15冊の絵本を各5冊ずつ注文を出したら、既に4点が在庫切れであると言われたことは書きましたが、実際に送られてきた結果は「ぴかくんめをまわす」など11点は注文数の5冊を、「ぐりとぐら」は3冊「たからさがし」1冊「ふるやのもり」と「ぞうくんのさんぽ」はゼロでした。

変わらぬ読者軽視の体質

さて、今度のことに対して、ここまでの経緯を書きましたが、福音館書店は書店や読者にとっても不親切だと思いました。

この体質は、これまでの「大型絵本」問題や、「専売品と二重価格」の問題と質的には変わることがないのです。それは企業としての論理を優先させて、読者や書店の気持ちは何ら考慮していないということな

のです。

部長と課長が来店したとき、ぼくはこんなことも聞いてみました。

「3月26日から新しい絵本を出荷するということですが、26日以降は、これまでの780円の絵本は在庫があっても出荷してくれないのですか？」

皆さんは、福音館はどう答えたいと思いますか？

答えは、否。たとえ在庫があっても出荷はしないそうです。でもこれって、ちょっとおかしいとおもいませんか？

実は福音館のこの回答にこそ、今回疑問として提起したかった多くのことが含まれているのです。

まず、新規製版で既存の絵本を出し直すのですから、当然出版社としては、これまでの在古の調整をしなければなりません。何千冊もまだ在庫があるのに新しい本を出すわけにはいきませんものね。当然のことです。

ということとは、この企画は相当前から取り組んできたことになりす。事実、今回このピッポ新聞を書くにあたって、調べたら福音館のブログに行き当たりました。

(公開しているブログなのに、来店の折り、課長や部長はこの存在を何故、教えてくれなかったのですかね?)

それによると、既に1年も前に「ぐりとぐら」の作者である中川李枝子さん、山脇百合子さんと新規製版について具体的に話

し合っています。ブログによると、山脇さんは扉のぐりとぐらの絵を描き直してもいます。

しかも、福音館では今度のために、社内にチームまで組んで取り組んでいるのもブログから知りました。

それなのに、ぼくが「新版を出すことは、いつ決まったのか」と聞いたら、「比較的最近なんです」という嘘をこたえたのは感心しません。ぼくが「何故遅れたのか」を追求したため、せっぱ詰まってこたえたのかも知れませんが・・・。

在庫ですが、先程も書いたように発注した時点で既に在庫がなかったのが4点ありました。福音館としては在庫調整がうまくいったということでしょうが、新しい版にかわるのですから、在庫が無くなる前に読者に知らせのが親切というものです。

たとえ60円でも安い方を欲しい読者もいるのです。

これまでだって、福音館からは、在庫切れ(絶版にする?)になる、本の情報を提供してくれたではありませんか。これに基づいて、ぼくはお客さんにこのことをピッポ新聞やホームページを通じて知らせてきました。入手したい方はこれを見て注文をしてくれました。

旧版の在庫の 絵本はどうなるの？

では逆に、予定通りに在庫調整が期日までにできなくて、まだ在庫があるものはど

うなるのでしょうか？新しい絵本ができた時点で出荷しないこと、はつきり販売責任者が明言したのです。

ぼくは、在庫がまだあるのに出荷しないとは、これもまた読者に大変不親切なことだと思えます。理解できないことです。食べ物と違って、本には賞味期限はないはずですよ。

それでは、在庫の旧版はどうなるのでしょうか？

ここからはピッポ古書クラブとしては、とても興味の湧くところです。いずれは断裁してしまうのでしょうか？それともどこかへ流れていくのでしょうか？

先日、神田の古書市場に入札に出かけた折り、ちょっと面白いことがありました。売れに売れたという「ハリー・ポッターシリーズ」ですが、その5巻(上下)だったかな？新刊のまま(セットになって封も切らずにパックされたまま)のものが6セット入り一箱が消費税より安い値段で、山と積まれていました。

まあ、これが5巻だけというのがいかに古書市場だとは思いますが、どこからどのようにして古書市場に流れてきた物でしょうかね？

でもね、値段はともかく、この本は古本屋を通じて読者の手に届けられるだけ、本にとっては幸せなこともかもしれませんね。

これが経済効率だけが優先されて、断裁されてしまうのであれば、あらゆる意味で悲しいことです。

また話が横道に逸れてしまいました。元に戻ります。

実は本屋としては、こんなことにいちいち目くじらを立てずに、新規製版の絵本を黙って受け入れていても、先程の幼稚園のことを除けば、なんら問題は無いのです。ほとんどの本屋がそうしているのです。だって、例えば1冊60円とはいえども、絵本は値上げされるのですから、その分売り上げが増えるのですから。

今回の製版のし直しの最大の理由は、度重なる重版によって、製版フィルムが劣化して、初版当時の色と乖離してしまったため、これを初版当時の状態にできるだけ戻すことだという。このことはとても良いこと(当然)だと思います。

ブログや「あのね」を読むと新版の良くなったことの説明は、丁寧に語られていません。精興舎の部長が語っていることを読み、赤羽末吉の「だいくとおにろく」のおにろくの赤色の違いを見せられたり、また、「ぐりとぐら」の新・旧の色調の違いを見ればそのことは明らかです。

読者のことを考えたら、何故もっと早くからこれにと取り組まなかったかという疑問すら持つてしまいます。

初版当時より色合いが大分異なってしまっ

たことを認識していながら、今日まで放置してきた福音館の姿勢に疑問を感じます。

素人の素朴な疑問

さて、くどくどと書いてしまいましたが、最後にブログの精興舎の部長のデジタル製版についての説明について一言。

デジタル製版とはいかなるものであるかが、この説明で素人のぼくにも大体理解できました。それに説明は、今回の製版し直す絵本に沿って具体的でしたから、これに取組んだ人たちのよりよい物に仕上げようとすると姿勢も良く伝わってきました。

ただ、一つだけ疑問に感じた点があります。これは素人故の疑問なのかもしれませんが、皆さんはどうおもわれるでしょうか？

それは第3回の「ぴかくんめをまわす」の説明についてです。以下ブログを引用

原画の表現を修正する

それから、これは我々から提案させていだいたのですが、横断歩道の絵柄が新規製版の本では現代風に変えてあります。いろいろの場面に出てくる白線の引き方が初版当時と現代では変わっているため、子どもたちの交通安全教育にも使用されていることも考えて、編集部のご了解をいただいでデータ上で画像を修正しました。と、いう点です。

この「ぴかくんめをまわす」はこどものとも127号として1966年新版(最初は馬場のぼるの絵で1960年49号)としてた。当時の横断歩道には白線は横線だけでなく両脇に縦の白線もあったが、現代では縦線は無いので、これを削除したということです。

確かに縦線を消すにはコンピュータでは一瞬でできますが、そんなに簡単に手を加えてよいのですか？絵を描いた長さんが直すのならいざ知らず、ご本人がお亡くなりになっている現在、「現代風」に修正が許されるのですか？

横断報道の白線だけ「現代風」したところで、次のことは

同じことが言えますか？

この絵本の主人公ぴかくんは信号機ですが、当時の信号と比べると現在の信号機はデザイン的にはずいぶん変わっています。

これも子どもたちの交通安全教育のために「現代風」に修正しても良いことになりまね。もしそうしたら、もはや長さんの絵本ではなくりますか？

ぼくが解らないのは、この「修正」を編集部が了解したことです。

縦の白線を削除すれば、その絵本の用途(？)に合うからと言うのは作者や読者軽視ではないでしょうか。

皆さんはこれをどうおもいますか？

一本屋の愚痴話でした。